

スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館における ブロニスワフ・ピウスツキに関する展示 ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ



近年、ポーランドの著名な政治家ユゼフ・ピウスツキ (1867~1935) の兄ブロニスワフ (1866~1918) の生涯への関心が高まっています。今までは、民族学者・日本学者・言語学者



以外、ポーランドの一般の人々は彼のことをほとんど知りませんでした。いくらアルフレド・F・マイエヴィチ教授らの著書が発行され読まれても、普通のポーランド人はブロニスワフについてアイヌの民族学研究以上のことはほとんど知りませんが、最近制作されたいくつかの本、映画、特別なイベントのおかげで徐々に人気が高まっています。

2018~20年に十分な人気を得た2冊——パヴェウ・ゴズリンスキ Paweł Gozłinski 著『アカン Akan』(ニヴフ語で「兄」の意味)とジグムント・ミウォシェフスキ Zygmunt Miłoszewski 著『価格の問題 Kwestia ceny』——が本屋に並びました。

ゴズリンスキの本は、ブロニスワフ・ピウスツキの生涯、彼の青春、ロマンチックな愛、突然の逮捕、投獄、流刑、サハリンのロシア人、ニヴフ人、アイヌ人との冒険、サハリンから日本経由でヨーロッパへの帰国、そして不幸な最後の年を描いています。かなりセンセーショナルな本で、非常に短い文章で書かれ、行動の急転換に満ちています。

一方、探偵小説や映画シナリオの作家としてポーランドで有名なミウォシェフスキは、ピウスツキのサハリン体験を利用して「秘密のアイヌ医学」の物語をつくりました。現代の冒険家たち(海賊も含めて)が癌に効く奇跡的なハーブ療法を探し求めて一儲けを企みます。ミウォシェフスキの物語には本物のブロニスワフはあまり登場しませんが、一般に探偵小説あるいは冒険小説としてよく読まれています。

2018年には、イエジー・ホチウオフスキ Jerzy Chociłowski 著『ブロニスワフ・ピウスツキの運命との闘い Bronisława Piłsudskiego pojedynk z losem』という本も出ました。これは民族学者の困難な人生経験を描いた読みやすい書物です。

以上の3冊のおかげで、ピウスツキという人物がポーランド人の意識の中に広まるでしょう。

2018年に日本美術技術博物館マンガが主催した国際会議と、優れた学者による報告を含む2つの美しく徹底的に準備されたカタログの発行は、ブロニスワフ・ピウスツキに関する諸問題についてポーランド人への情報提供に大いに貢献しました。

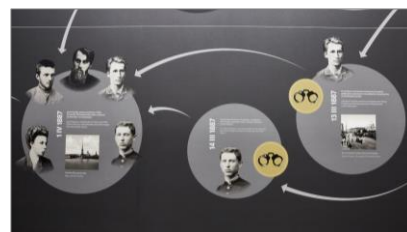
2020年、ワルシャワ郊外のスレユヴェク市にユゼフ・ピウスツキ博物館がオープンしましたが*、新

型コロナウイルスの大流行のためすべての活動は2021年3月まで延期されました。今は2回目のロックダウン実施中で、当館の再開は夏になります。

当博物館にはブロニスワフ・ピウスツキに関するいくつかの展示スペースがあります。

1. 一つ目は大まかにいってピウスツキ家の歴史——リトアニア(当時はロシア帝国領)のズーウフ村の屋敷、ヴィルノ(現ヴィルニユス)の中学校での教育、当時のロシア化政策とそれへの抵抗運動、特にピウスツキ兄弟が組織した地下自主教育サークル「スプイニャ」の説明など興味深い展示があります。

2. ブロニスワフについて一番詳しく語るのは、ペテルブルクとヴィルニユスに関わるアレクサンドル三世暗殺未遂事件、そしてそれを計画した若者たちの裁判とその後のシベリア流刑の事です。暗殺計画はグラフィックで簡単に説明してあります。=上図=



3. しかし一番面白いのは、シベリアでのピウスツキ兄弟(主にユゼフ)の滞在、活動、そして社会主義との接触と、その人間的成長です。=下写真=

ブロニスワフ・ピウスツキの業績について考えるとき、彼はユーラシア大陸の広大な地域の科学的および人道的な探検に貢献した非常に多くの優れたポーランド人の一



人にすぎないことを覚えておく必要があります。私たちの知る限り、18~20 世紀の間、何万人ものポーランド人がシベリアに移住し、この地域の文明と文化の発展に大きく貢献しました。だからこそシベリアは大変有意義な領域なのです。流刑者のうち何人かはカムチャツカに送られ、日記や興味深い回想を書いた人もいます。=前頁上左写真=

こういう風に、シベリアでのユゼフ、サハリンでのブロニスワフの流刑と活動が、形式は短いけれど、内容は面白く語られます。展示スペースに入ると照明が徐々に暗くなり、スピーカーから録音されたシベリアのシャーマンの声と説明が聞けます。

(Jadwiga Rodowicz-Czechowska, スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館学芸員、元駐日ポーランド大使)

新刊紹介

『エカシの森と子馬のポンコ』

加藤多一(作)、大野八生(絵)

ポプラ社

2020.12

『少女からおとなになる子馬のポンコを
やさしいまなざしで描く物語』

この児童書が手許に届き、先ず表紙のあどけない子馬のまなざしと目が合いました。そのイラストのすぐ下の帯の冒頭にはこう記されています。

「当然、“やさしいまなざし”を発しているのは、著者加藤多一さんご自身であり、その多一さんがこれまで有形無形の育みを受けた故郷のご家族や、多くの友人、そしてこの大地と包み込む大気、草や木や虫、動物たち全ての生き物達こそが、やさしいまなざしの大きな相似形とも言えるでしょう。」

著者加藤多一さんとは個人的にも多少交流に恵まれた経緯もあって、リスペクトと同量の親しみの



混ざる心持ちが慢心にならぬよう自重しながらも、戦後というエポックを代表する児童文学者、北海道を題材に多くの著作をされた第一人者の加藤多一さんは、私にとっても、多一文学に触れて育った児童生徒たちにとっても、正にエカシのような存在であり、アイヌの歌物語、叙事詩、昔物語の真髓

と情動を受け継ぐ大きなお方でもあります。

作中のエカシの辛い記憶やその教示の奥深さ、そしてカメムシの悠久のつぶやき、風の声、水の姿、ふわふわたち、そしてエカシの友達のようなおじじの存在感。それらの揶揄や暗示と、現象は、児童向け故にサクッと太い彫刻刀でえぐってはいませんが、多一さんの人生観の強い信念に根ざしていて、傷ついた者たちを見て見ぬ振りには決してしないぞという精神性に貫かれ、一つ一つ、一章一章が生(ナマ)の冷静なサイエンスであり、物事の道理であ

るなあと、うなずき、うなずき読みすすみました。

この感想文を書く幸運な機会に、数年前の新緑の季節、多一さんら向学心の高いお仲間と道南へ旅した時のエピソードを一つご披露させていただきます。

上磯のトラピスチヌ修道院の一本坂を登りきった所の遅咲きの桜が見事で、私が思わず花びらに触れようとした時、多一さんが「花芯に触ってはいけないよ。大事なところだからね」と言っておいて、花卉をサクッと噛んで見せました。何事も五感を使って親しむのが流儀の多一さん。=写真右端=



生命の物語を分け隔てなく、タブーや誤魔化し無しで伝え、多数に同調、権威に迎合しないフラジャイルな(壊れやすい)個の尊厳、意識開示へ向かうエカシ多一さんの含蓄ある言葉に触れたひとときでした。

「人が育つための大切ないい土と水そして夢という種子を自分の土地の中に、そっと入れてほしい」と、あとがきにかえた手紙(テマミ)で多一さんはしたためています。この手紙をたくさんの子供たちや、その親、その祖父母、教師や大人たちが受け取ってほしいと心から願うばかりです。

自由の森を作るのは、私たちの暮しの一歩からでもあり、そして北海道開拓という名の 150 年以前の先住へ思い馳せる想像力で、知性豊かな森を繁らせてほしいと願う一冊です。

女性こそ自由に自分の人生を歩んでほしいという、主人公ポンコの女性性に照準を合わせた結びで合点の笑みが漏れました。女性は素晴らしいという多一さんの口癖を思い浮かべたからでしょう。

多一エカシ、ありがとう。

(熊谷 敬子、本会運営委員)